

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 68
2018年 5月



スタディ・ツアーでの一コマ。死海のエクスカージョンに出発前。2009年プロジェクト記念のオリーブ前で。(エルサレム)

今年5月14日はイスラエル建国70周年。一方パレスチナは、その翌日を「ナクバー大惨事の日」と呼び、自分たちの土地を奪われ「強制移住」させられたことに抗議する日としています。一つの事実も立場によってまるでコインの裏表……。その5月14日、米国は大使館をエルサレムへと移転しました。各地で抗議行動やデモが繰り返され、鎮圧を狙うイスラエル軍の武力行使によって、特にガザでは多数の死者や負傷者が出ています。

この夏行われる「平和の架け橋 in 長野」2018プロジェクトには、緊迫するガザから26歳の青年が来日、またイスラエル海軍の任務でガザ沖合の封鎖にあたった青年も参加する予定です。どんな出会いになるのでしょうか？ プロジェクトに参加する若者たちが共同生活での対話をとおして友情を結び、平和共存の体験をしながら互いの理解を深め、さらには平和の作り手として成長してほしいと願っています。

皆さまのいっそうのご支援をお願いいたします。

理事長 井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

イスラエル・パレスチナ再訪で 改めて考える

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

日本の若者をイスラエルとパレスチナの現地に送り、紛争を生きる現地の様子をじかに見てもらうスタディ・ツアーというのを、当NPOは毎年企画しています。今年は2月22日（木）出発、3月5日（月）帰国という日程で12人の学生が参加、筆者も同行しました。イスラエル、パレスチナの地を踏むのは、取材で最後に現地を訪れた2002年夏以来、ほぼ16年ぶり。エルサレム、ベツレヘムを中心に、若者たちといっしょに和平が進めぬ現状を見たり、そこにつながる歴史を振り返ったりして、改めてイスラエル・パレスチナ問題を考えさせられた旅でした。

東エルサレムを消す？路面電車

2月23日未明にイスラエルのテルアビブ・ベングリオン空港に到着し、エルサレムに向かった一行は、ほぼ休むことなくホロコースト記念館「ヤド・ヴァ・シェム」を訪れました。目的地へは路面電車で。



エルサレム旧市街を背景に走る路面電車。

街中はそれほど土地に余裕がなく、地面を掘るとすぐに遺跡が出てきて工事が中断されそうなエルサレムには想像もできなかった路面電車が開業したのは2011年。その路線図をたどると、パレスチナ人居住区である東エルサレムの北部にユダヤ人入植地が拡大する地域と、イスラエル建国を訴えるシオニズム運動の提唱者の1人、テオドール・ヘルツルが眠る丘を結んでおり、途中の数キロは、1967年以前の東西エルサレムの境界に沿って走っています。東エルサレムとの境界を

あいまいにし、「エルサレムは不可分のイスラエルの首都である」というイスラエルの主張に合わせて、エルサレムの一体化を強調するものに見えてきました。

アメリカのトランプ大統領が在イスラエル大使館をエルサレムに移すと宣言したことは、エルサレム全体を自国のものと主張するイスラエルの政策を後押しするものです。パレスチナ側の反発、そして国際社会からの「和平の枠組みを壊すもの」との批判にもかかわらず、イスラエル建国記念日の5月14日、移転を断行しました。歴史を無視した愚行が新たな流血を招いています。

ユダヤ人とパレスチナ人の生存権

ヤド・ヴァ・シェムは、第2次世界大戦中にナチス・ドイツにより600万人ものユダヤ人が虐殺された記憶を残す博物館。迫害の歴史、強制収容所の凄惨な状況などが様々な形で伝えられ、見終わった学生たちからは「（ヘブライ語で破滅などを意味する）ショアを体験したユダヤ人にとっての建国の意味がわかった」という感想が語られました。この展示から受ける素直な反応だと思います。絶滅の標的にされた民族が、自分たちの命を守ってくれる「ホームランド」を望む切実な思い。それが「ユダヤ人にとっての生存権の保証」としてのイスラエル建国につながったのです。

問題は、それが「パレスチナ人の生存権を損なう」形で果たされたということです。占領され、和平合意を経ても国家を持てずにいるパレスチナ人は、後に述べる様々な生存権の制約をこうむっています。

ヤド・ヴァ・シェムの感想としては「こんなひどい仕打ちを受けた民族が、なぜほかの民族に対する差別、抑圧に向かうのか」というのもありました。これも素直な反応・疑問でしょう。ツアーの事後研修の中でこの疑問が述べられたのに対し、「やられたようにやってしまう、ということがある。ほかの人たちが、他の方法があると教えるとい

いけど、イスラエル側にそれを受け入れる姿勢があるかが問題」という意見が出ました。まさにそこが問題で、ユダヤ人にある「わが民族以上の被害者はいない」との思いが、加害者の側面を持っていることを見えなくしていると思うのです。

教育支援先を見学

当NPOの活動の重要な柱の1つに、聖地の子どもたちの教育支援があります。イスラエル・パレスチナ紛争の陰に、貧しさのため満足に教育を受けられない子どもたちを財政的に支えようというものです。ツアー一行はエルサレム旧市街にある学校、ベツレヘムの聴覚障害児や心身障害者の施設を訪れました。児童・生徒の中には苦しい家庭環境で情緒不安定に育ちながら、支援金に支えられて明るい表情を見せるまでになった子の姿もありました。

支援先の1つであるベツレヘムの「飼い葉桶乳児院」は、名誉殺人（注）を免れた乳幼児の保護施設。一行がそこを訪れた日の直前に収容されたという新生児が紹介されました。

考えさせられたことの一つは、福祉関係施設の運営などにパレスチナ自治政府が手を差し伸べていないということです。

（注）名誉殺人：婚外交渉により子供ができた場合、母親の家族が母親とその子を殺害するのはイスラムの教義により正当とされている、という説。保守的な地域の風習と結びついているという見方もあり、また、イスラム法でも禁じているという説もある。

強まるパレスチナ人への締めつけ

1km四方の城壁に囲まれたエルサレム旧市街には、大きく分けてムスリム（イスラム教徒）地区、キリスト教徒地区、ユダヤ人地区、アルメニア人地区があります。境界があるわけではないのですが、住み分けられてきました。ところが近年、ユダヤ人地区以外にイスラエル国旗が掲げられる建物が増えてきました。ムスリム地区の一角にイスラエル国旗がはためく光景を見て、ツアー参加者

の1人で中国にいたことがある学生が、チベットの寺院などあちこちに中国国旗が掲げられていたのを思い出した、と言っていました。現在、中国の一自地区であるチベットは、かつて独立国だったことがあり今も民族の独立を望む機運がある所。翻る国旗は、それに対して支配者はだれであるかを見せつけるようなものと言えそうです。

パレスチナ人の居住権を狭める試みは、政策として進められているようです。旧市街に事務所を置く「聖イヴ協会」というカトリック系の人権団体のラファール弁護士が、次のような事例を話してくれました。

イスラエル政府は、東エルサレムのパレスチナ人の土地を、様々な理由で接収あるいは家屋を破壊している。ガス・水道・電気代を払っている証明がないと、あるいは家族に1人でも逮捕歴や治安問題を起こした記録があると、学校や医療のサービスを受けにくくする。どこかの国の市民権を取るとエルサレムの居住権を失い、二度と戻れなくする、など。ラファール氏によると、これらはエルサレムのパレスチナ人口を抑えるため、イスラエル政府は、1980年代には20～22%にしたいと言っていたとか。パレスチナ人の出生率が高いため、現状は全人口90万人のうち約40%ほどだそうです。

同協会は、法廷闘争で家屋破壊を止めたり住民としての権利を守ろうとしているものの、イスラエル側は法律を厳しくして抵抗を難しくしているということです。それでもなお闘うのは「司法に訴えることで破壊などの執行を遅らせられるし、問題を明るみに出して圧力をかけられる」とラファール氏は言います。

パレスチナ自治区のベツレヘムにあるデヘイシャ難民キャンプでは、もっと厳しい状況を聞かされました。案内してくれたジハード・ラマダン氏（写真・次ページ）によると
▽1万6千人の居住者のうち8千人が子どもで、国連が運営する学校は二つしかなく十分な教育が受

けられない

▽失業率は63%にも上るうえ、電力・水は常に不足し、建物の屋上には貯水タンクがひしめく

▽西岸の水の80%はユダヤ人入植地に回される

▽自治協定により自治政府が警察権も持っているはずのA地区なのに、今もイスラエル軍が治安を理由に侵入してくる。周辺を見渡すと、難民キャンプは軍の検問所と入植地で包囲されているようでした。



ジハード・ラマダン氏。訳すと「聖戦・断食月」さん。

「互いを尊重」勇気ある人々

イスラエル側でパレスチナ側の窮状を知る人、関心を寄せる人は、そう多くないようです。自治区とイスラエルを隔てる分離壁の存在は大きく、パレスチナ人の往来の自由を奪っている半面、イスラエル人を脅かすテロは確かに減っています。その分、治安＝和平への関心は薄れ、また、壁の向こう側の様子を見なくてすむため、真の和解と共存がなければ平和は続かないという思いも浮かばないようです。



エルサレムのパレスチナ人地区を囲う壁。

そんな中で、双方の交流を目指す活動に取り組んでいる人もいることを、ベツレヘムのパレスチナ人女性が教えてくれました。

マリアン・サアデさんというその女性は16年ほど前、家族と乗っていた車がイスラエル兵の銃撃を受け、妹が即死、父は重傷を負い、自身も膝を撃ち抜かれた経験を持つ



マリアン・サアデは、当法人最初のプロジェクト、2005年の《平和をつくる子ども交流プロジェクト》に参加した。

ています。「テロリストが乗った車が来る」との情報で待ち構えていた狙撃兵が、知らされた特徴と似た車を攻撃したのが、一家の車でした。マリアンさんは収容されたイスラエルの病院で「よくしてもらった」ことを忘れず、その思いを、悲惨な目に遭ったことへの恨みで消すことをしなかったのです。

いま彼女は、イスラエル兵との衝突などで殺されたパレスチナ人の親と、テロで殺されたイスラエル人の親同士が交流する「ペアレンツ・サークル」という団体に活動しています。「互いに恐れを抱かず、権利を尊重し合えるようになる」ことを目標にするこの会のメンバーは、双方合わせて約600人。両民族の間の無理解や憎悪が強まっている現状では活動が難しく、「敵に通じるのか」と非難され脅しを受けることもあります。そんな中で、子どもや母親たちに憎しみを乗り越えるよう働きかけるのは、勇気のいることです。毎年催している、双方の犠牲者に敬意を示すセレモニーへの参加者が増えてきていると、マリアンさんは言います。双方に「互いを尊重し合おう」と考える人々がいることに、わずかでも希望をつなげられます。



2018 スタディ・ツアーの感想

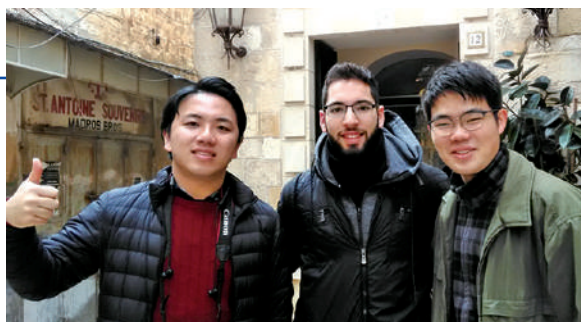
紛争下に「友だち」が住んでいるということ

茂野 新太 (大学3年生)

もともと私は、知的好奇心からこのスタディ・ツアーに参加しました。ユダヤ人・アラブ人の文化、紛争解決、中東問題、言語など、興味ある分野が大いに盛り込まれたこのツアーは、私にとって願ってもない絶好の機会でした。私がこのツアーに参加して、何か変わるのだろうか。

事前研修で、様々な題材をもとに平和の大切さが説かれるなか、私はやや懐疑的でした。一人の日本人学生がイスラエル・パレスチナの地を10日間うろうろしたところで、変わるのは経済効果と私の満足度ぐらいだろう、と思っていました。ただ、ツアーを長年率いる井上弘子さんが事前研修中に繰り返していた、「友だちを作りなさい」という言葉が少し気にかかっていた。

イスラエルに着いてからの私たちは、予想通りエルサレム・ベツレヘム・テルアビブの名所を回り、予想通り“ぼったくられ”、予想通りに私の知識は拡大しました。ただ、一つだけ、私には予想以上のユダヤ人・アラブ人の友だちができてしまったのです。ホストファミリーやその友だち、過去にこのスタディ・ツアーに関わったことのある人々、タダで店のコーヒーを振舞うお兄さんなどなど、このような友達ができただけでは、すなわち、スタディ・ツアーを終えて日本に帰ってきてからは、イスラエル・パレスチナという土地やエルサレム・ベツレヘム・テルアビブ・ラマッラなどの都市が、異国ではなく、友だちの住む



スタディ・ツアーで、エルサレムにて。宮川大輝 (左) と茂野新太 (右)。ホストファミリーのジャック・ダーダル (中) は平和の架け橋プロジェクトに2回参加。

町として見えてくるようになりました。

例えば東日本大震災が起こったとき、私には東北に住む知人はいませんでした。従って、多くの人が亡くなっているという報道を目にしても、ただ私にも影響があるかもしれない原発の問題だけが記憶に残りました。しかし地震の起こった数日後、昔の友達のお父さんが地震当時仙台に住んでいたことを母から聞いた時はじめて、地震が身近なものとして、かつての知り合いを襲った大災害として再認識されました。

友だちになった現地の人々のおかげで、今後パレスチナ問題に関するニュースは、今までよりもリアルに私の耳に届くでしょう。イスラエル・パレスチナの各地で起こる紛争の火花は、大学の講義や就活の時事ネタではなく、私の“友だち”を殺しかねない炎として私の目に映るでしょう。「友達を作りなさい」と井上弘子さんが事前研修で繰り返していた言葉の重大さが、日本に帰ってきてやっと理解できました。

2018年のスタディ・ツアー参加者の感想はホームページをご覧ください。 <http://seichi-no-kodomo.org>

聖地の子どもたちを支援してくださる日本の皆様へ

感謝のチャリティ・コンサート

ヤクーブ・ガザウィ パイプオルガンの響き

ヤクーブは、「聖墳墓教会」(エルサレム)、「聖誕教会」(ベツレヘム)、「受胎告知教会」(ナザレ)など、聖地の主要教会のオルガニスト。

当法人のプロジェクトに数多く参加し、今は当会現地スタッフとして活躍しています。

そんな彼が日本の皆様への感謝のため、また「聖地の教育支援」のために、

この夏もチャリティ・コンサートを開きます。

8月下旬から9月上旬にかけて、東京などで、複数回開催予定。

詳細は「オリーブの木」次号でお知らせします。ご期待下さい。

聖墳墓教会(エルサレム)で演奏中のヤクーブ▶

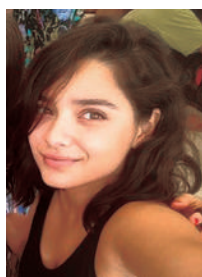


Pipeorgan
Ya'coub GHAAZAWI



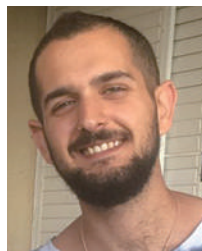
シーラ・バハット
(22歳)
イスラエル人

空軍での兵役を終え、今は自閉症の子供たちの先生をしています。詩と執筆が大好きです。大学の政治学の授業でエルサレムのツアーに行き、アラブ人やユダヤ人、多くの文化に触れることができ、住みたいと感じました。また日本語を3年間学んだので、日本に強い関心があります。このプロジェクトは、こうした願いがかなえられる良い機会なので、とても嬉しく思います。



ナルキス・メヘラリ
イェヴ (23歳)
イスラエル人

アゼルバイジャンで生まれ、18年前にイスラエルに移り住みました。音楽とダンスが大好きです。両親は平和主義者で、兵役が免除されるユダヤ教超正統派の高校に通わせてくれました。大学では、模擬国連に参加しました。両国の平和には対話と教育が重要だと思います。平和の問題を無視するのではなく、解決に向け根気よく取り組むべきだと思います。



イムリ・ゲフェン
(24歳)
イスラエル人

高校での専攻は芸術と写真で、読書と絵を描くことが好きでした。兵役では情報部でのデスクワークだったので、紛争を直接感じることはありませんでした。

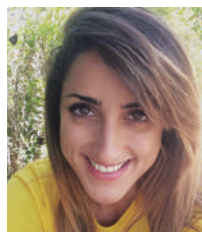
私は、この国が平和になるには正しい知識と教育が大切だと思います。プロジェクトで、パレスチナ人の考えを聞き、正しい情報を知りたいです。プロジェクト後は教育や芸術によって平和の道を模索したいです。



オハド・ナヴォン
(24歳)
イスラエル人

海軍に4年半務め、指揮官として40人以上の部下を統率しました。兵役後は10ヶ月間、世界各地を旅行しました。異文化と触れ合うことに大きな喜びを感じます。現在は旅行会社に勤めています。

アラブ人の友達はいませんが、今までパレスチナ人とは話したことがありません。プロジェクトでその機会が得られ、とても楽しみにしています。



アシル・ファル
ハット (24歳)
イスラエル国籍
アラブ人

私は、法律事務所でインターンとして働いています。イスラエル・パレスチナの両方の人々と接して育ちました。そして、誰であろうとも愛しなさい、受け入れなさいと教えられました。ただ、残念なことに私の国では、平和の話題は好まれません。

私の夢は、全ての人がお互いに受け入れられ幸せに暮らすことです。それは可能だと信じています。

2018プロジェクトのあらまし

日程

2018年 8月6日(月)～19日(日)【14日間】

プログラム

第1部 長野で国際文化交流、ボランティア活動など

長野の雄大な自然にふれ、善光寺での仏教体験やボランティア活動などをおとして、市民と親しく交流。また各自の紛争体験を語る集いで、日本の皆さまに最新の紛争事情をお知らせします。

第2部 東京・JICAにてワークショップ

プロジェクトの体験を共有し、平和実現の道について考えます。一般の学生、社会人に平和メッセージを発信します。

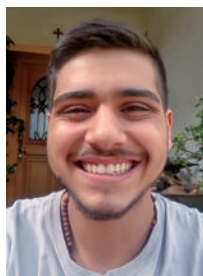
細部は計画中



イスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者とともに、共同生活、ボランティア活動、市民交流をおとして、平和共存の可能性を体験します。長野と東京で、人々とのふれ合いを通して互いに相手を大切にすることを学び、平和といのちについて考えます。

緊迫する聖地から生の声を発信!

封鎖と空爆が続くガザ地区の若者が来日、また軍で封鎖任務の経験があるイスラエル青年も参加。紛争地に暮らす人々の生の声をお届けします。



ラウイ・ビシャラ
(18歳)

イスラエル国籍
アラブ人

僕はイスラエル国籍を持つアラブ人として、イスラエル北部のタルシーハに住んでいます。そこはユダヤ人とアラブ人（キリスト教、イスラム教徒など）が共存している町なので、小さい時から互いの多様性をごく自然に受け入れることを学びました。

私は他の環境で育ったパレスチナ人やユダヤ人や日本人がどんな考えや経験を持っているのか、日本のプロジェクトでぜひ分かち合いたいと思います。

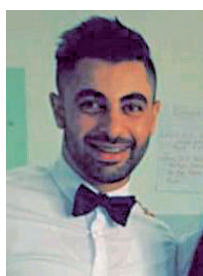


ラミ・アルジェルダ
(26歳)

パレスチナ人

私はイスラミック・ガザ大学で土木を勉強しました。現在ガザのカトリック福祉協議会で働いています。ガザに住んでいるので、日本のプロジェクトに参加するには、ガザの検問所を通る許可、国境を通る許可、空港を使用する許可など様々な手続きが必要です。

私の夢はいつでもどこでも自由に行き来ができる世界ですが、そのためには若い世代に、平和実現を信じて、互いに尊敬し対話するよう教えることが大切だと思います。私はガザに帰ったら、平和構築のリーダーになりたいです。



アハメド・ヤシン
(20歳)

パレスチナ人

僕はアメリカで生まれ育ち、高校の時に家族とともにエルサレムに移住してきました。しかしイスラエル国内での身分がはっきりせず、未だに身分証明書さえ取得できません。僕はパレスチナ人としての誇りを持っています。だからプロパガンダで言われているように、僕たちはテロリストでも野蛮な人間でもないと言いたい。

僕たちが欲しいのは、ただ普通の人間としての権利と平和です。僕はお年寄り子どもが大好きです。



ナディーヌ・シャヒン
(24歳)

パレスチナ人

私は現在音楽（特にチェロ）を教えています。またエルサレム・ナイツ合唱団で歌っているので、今まで何度も音楽を中心とした平和活動に参加しました。みんなで協力して美しいハーモニーを作り上げる音楽は、平和を構築する素晴らしい手段だと分かりました。スポーツやボランティア活動も同じだと思います。

互いに心から愛し合わなければ平和は実現しないでしょう。私はこのプロジェクトで同じ世代のイスラエルの若者と出会い、対話を通じて互いに理解し合い、将来への夢と希望を分かち合いたいと思います。



「平和の架け橋 in 長野」2018 プロジェクト 支援イベントのお知らせ

出川展恒 でがわのぶひさ 講演会



NHK解説委員
**イスラエル・パレスチナ
紛争の行方**

聖地エルサレムへの米大使館移転。パレスチナ人の激しい抗議。影を落とすシリア内戦やイラン核問題。イスラエル・パレスチナを中心に、混迷する中東情勢を解説します。

7/1(日) 12:00 (開場 11:45) **¥1,000**
カトリック吉祥寺教会 (JR、井の頭線「吉祥寺」駅より徒歩約5分)

イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい
ソプラノコンサートとビュッフェのひととき

ソプラノ

家田紀子 ピアノ **瀧田亮子**

パレスチナ料理店〈アルミーナ〉によるビュッフェタイム
併催◎イスラエル・パレスチナグッズ お楽しみバザール

7/16 (月・休) **17:00** (開場 16:40)

聖パウロ修道会 若葉修道院 地下ホール

(JR、地下鉄「四谷」駅より徒歩約7分) **¥5,000** 80名限定

チケットのお申し込み・お問い合わせは… **TEL 03-6908-6571** (当法人事務局) **TEL 090-6538-3255** (井上)

2018 スタディ・ツアーの一コマ



▲イスラエルの入植地ハル・ホマを背景に、ベツレヘムのおみやげ職人たちと。



▲聖ヨゼフ学院（エルサレム）で、幼稚園、中学生のみなさんと楽しいひとときを過ごしました。



▲名誉殺人を免れた子どもたちと。飼葉桶乳児院（ベツレヘム）



▲日本から来たお姉さんと。エフェタ聴覚障害児スクールで。



▲当法人の元理事石黒朝香さん（中央）は今、パレスチナのため国連の仕事で活躍中。現地スタッフのヤクーブ・ガザウィ（右）と懐かしい再会。左はスタディ・ツアー初参加の小木雄太さん。（エルサレム）



街で出会った子どもたち

◀復活祭の日、エルサレムで。おめかしして聖墳墓教会のミサに向かう子どもたち。

写真撮影
吉田梨乃、平田すみれ、
ダリーヌ・ラマ、井上弘子、
茂野新太